加川校長[[1]](#footnote-1)

香山光郎

加川校長は、第二時間目の授業を終へて、教官室に入つて來た。Ｋといふ、田舎の新設公立中學校の假校舎で、校長室といふものがない。部落の、私立學校の、校舎の教室を二つ借りて、一つは教室、あと一つは教官室に當ててゐる。

　白墨の箱を置いて、加川は、國民服の上衣を脱いで、椅子の脊にかける。しやつは汗でびしよ濡れだ。まだ若々しい加川の顔は酒を飲んだやうに赤い。

　加川は、ほつとするやうに扇子を振つて、涼風を貪る。つて汗ばんだ皮膚に、扇子の風氷のやうに冷かつた。

　トタン屋根のこの校舎は、八月の日射を受けて、火鉢を天井にぶらさげたやうだ。

　『校長先生、こんなものが來て居ります。』

　學校擔任の神林が、一通の公文を、持つて來て、加川の前に差出した。

　『Ｔ公立中學校。』

　加川は、封筒の裏に印刷してある、差出人を見た。京城のＴ公立中學校とある。

　『これは何ですか。』

　『木村の成績証明の請求です。木村の奴。Ｔ校に編入試験を受けるらしいんです。』

　神林は、校長席の前に立つてゐる。

加川は、封筒の中身を讀んだ。そして力を落すやうに、眼を瞑つた。加川は、木村太郎の父の義道といふ男が、

　『どうぞ、私の子供をお預り願ひます』

と、入學試験の時に、訪ねて來て、悲痛な面持で頼んだことを思ひ出して、裏切られた憤激を感じた。

　神林は、校長の顔色を伺ひながら、聞いた。

　『成績證明をしてやりなさい。』

　加川は、輕くいつた。

　『はい。では木村太郎の成績證明書を發送致します。』

　神林は、加川に一揖して、席に戻つた。

　加川が、官舎に歸つたのは、午後四時頃了であつたが、いたく　悄氣て居つた。

『どこか、お具合が惡いんですか。』

　加川の妻の浪子が、主人の顔色を心配するほどであつた。

　『馬鹿な奴だ。何であんな學校へなんか、編入試験を受ける？』

　加川は、こんなことを呟きながら、書齋に入つた。

　浪子は、主人が何をいつてゐるのか、意味が解らなかつたが、何か、又一つ、心配事が殖えたのだらうと思ふと、夫が氣の毒になつた。

　『お風呂にお入りなさいませ。まだ少し温い[[2]](#footnote-2)かも知れませぬけれども。』

　浪子は、夫の服を、庭の物干竿にかけながらいつた。

　『芙佐子は。どこへ行つた？』

　『氷を買ひに行きました。三時の列車で、Ｈから氷が來るといふので、まゐりましたの。』

　芙佐子といふのは、Ｈ高女三年の、加川の一人子であつた。

　加川は風呂に浸つても、木村のことが頭から離れなかつた。水村は弱々しい子であるが、學業も優れ、どこか精神的なところのある子である。加川の教へてゐる英語その他は、いつも滿點であつた。何しろ、地方有志の寄附金によつて新設された學校なので、その第一回生である、木村の組六十名は、必らずしも九百九十何人の受驗者の中の、もつとも優れたものには限らなかつた事情もあつて、學業成績は大概不良であつた。それだけに、その中で、二三の成績のよいものは自然校長以下教官たちに、望みをかけられる。それは、單に教員としての情としてばかりではない、第一回の卒業生から何人かの高校入學生を出さなくては、學校の名譽にも拘はる。問題の木村や、松本、石田などは、いはば、Ｋ校のホープであつたのである。

　加川としては、自分が校長であるから、教子に依怙贔屓があつてはならない。質は良からうと惡しからうと、皆一人前の日本人に作り上げたいので一杯である。金本、新田などが、店で、萬年筆や畫用紙を盗んだ事件が起つた際、加川は、まづ憤つたが、ついで泣いた。金本、新田二人を前に立ちせて、加川は、打擲したい衝動を感じたが、それを抑へると、止度

なく涙が流れて、さすがの金田、新田もしやくり上げて、

『校長先生、誓つて、立派な人になります』

と、いつたものだ。

　教官たちは、この兩人の除名を主張したが、校長は、改悛の機曾を與へるといつて、無期停學の處分をしたのであつた。彼等は、前學期末の勤勞奉仕の際に、復校を許された。

　かやうに彼は、六十名全部を一人前の人間に仕上げることを目標としてゐるのであるが、質のよい子はやつぱり可愛いゝ。教員も十五年もして居れば、生涯の弟子といふべきものがほしくなる。教員生活は貧乏籤といはれて居る。加川の高等學校の同窓生の中には、もう、親任官になつて居るものもゐる。文科同窓の中には、學位を貰つたものもあり、作家として、評論家として名を成したものもある。しかるに、加川は今やつと高等五等の中學校の校長で、名譽も美田もないのだ。加川は、せめて、自分の門下から、何人かの人材を出したい。自分を師と仰ぐものを、たとヘー人でも持ちたい。このことは、まだ誰にも話したことはない。妻にだつて話したこともなく、又話さうともしない。Ｋ中學の校長は、決して人が飛び付くポストではなかつた。浪子でなくても、Ｓ校の教頭の方が、Ｋ校の校長より何層倍、輝くポストである。Ｓ校に居れば、地位名望ある人たちとの接觸も出來る。それが所謂出世の緒として役立つことだらう。それを棄てて、加川は、K校の校長として來たのである。それには、お召しといふ氣持が主ではあつたが、自分の設計通りに、弟子を作つて見たいといふ願望も切なるものであつた。

　加川のＫ校へ來るのを止めたものは、妻の浪子ばかりではなかつた。彼の同僚や親友でさへ、

　『君、辭退したまへ』

と忠告したものである。加川が、Ｋ辺校長になつたのは、世の怜悧な人から見たら、實に馬鹿馬鹿しいことであつた。が嫌つて引受けないものを何故引受けるか、氣が知れないといふのであつた。

　『皆辭退したら。一體誰が行くんだ。』

　加川は、眞面目にかういつてゐた。

怜悧な人は、笑つた。

　五月一日。Ｋ國民學校の講堂を借りて、Ｋ中學校の開校式並に入學式が擧行された日には、冷い風が雨を吹きつけてゐたが、加川は、骨をKの地に埋めむといふ、悲壯な決意でこの式に臨んだものである。式場に參列の來賓は、郡守、署長、面長などの、當地方の役人たちや、道から内務部長、學務課長が來てゐたが、あとは、校長のいふことを聞き分けてくれさうもない、朴訥な農民了であつた。都市の知識階級のあつまりしか見たことのない、加川としては、この會衆に對し、異様な感じもしたし、がつかりもしたのであるが、加川は、

　『かういふ無智な民衆に、皇國精神や文化を植ゑつけるのが、余の任務了である』

と、自分にいひ聞かせて、氣を引立てたのであつた。

しかし、爾後四個月、學校の事は、加川の思ふ通りに行かないことが多かつた。校舎の建築は何時始まるかさへ解らないし、校長になりてさへないこんな片田舎では、教員に來てくれてもない。教錬の神林は、軍人であり、僧侶であるだけに、

『よろしい。お手傅致しませう』

と、大都市の學校を棄てゝ來てくれたが、富永、増田など、平生教育界の志士を以て自任してゐたものも、親友である加川[[3]](#footnote-3)の勸誘に應じてくれない。

　『どこ敎育報國の誠意があるかツ』

温厚な加川は、憤激したのであるが、富永、増田等にいはしむれば、田舎の子供を敎へることだけが敎育報國ではなかつた。

　『君の志は壯とするが、要するに君は物好きだよ。』

　增田は、加川に、こんなことまでもいつた。

　敎員陣は揃はない。生徒は思つたよりも、質が惡い。折角承諾して貰つた、地歷の奥村は就任前に病死する。學父兄は冷淡である。おまけに、飲料水は惡くて、乏しくて、浪子や芙佐子は下痢をする、お出來が出來る。ふんだんにあるはづの野菜さへ中々手には入らぬ。砂糖や石鹼の配給も京城よりはお話しにならないほど量が少い。晩酌の酒も手に入らぬ。

女たちには、話相手もなければ映畵一つ見るにも、汽車で一時間も揺られて、Ｈまで行かなければならない。

　加川の決心は、これしきの艱苦でめげはしないが、ほとほと困つては居る。それに木村の轉校問題である。

　加川は、氣持の惡いのを洗ひ棄てようとするやうに、兩手で湯を掬つて、ぶるんぶるんと顔を洗つた。

『たゞいま！お母さん、氷ないのよ。切符がないと賈らないんですつて。』

　芙佐子の聲が聞えた。

『氷なんかなくてもいゝぞ。』

加川は大聲でどなつた。

『お父さま、おかへりなさい。』

　芙佐子は、表で大聲でいふ。

　芙佐子の聲を聞くと、加川は氣分が和やかになつた。わが子の樂しさうな聲が、加川の痛められた心を撫でゝくれたのである。

　水質が惡くて、シヤボンが利かない。加川は、彼のいはゆる手シヤボンをつかふ。手シヤボンとは、ごしごし手で擦ることだ。

『お父さま。お着換』

　芙佐子は浴方[[4]](#footnote-4)と襦袢と帶とを、亂籠[[5]](#footnote-5)に置く。

　『水汲んで上げませうか。お父さま。』

　『ある。』

　『今日は。おビールが三本あるわ。わたし、さつき貰つて來たの。』

　芙佐子は、こんなことをいつて、廊下を鳴らして去つてしまふ。

　『靜かに、歩け。』

と、加川は叱つたが、微笑する。

芙佐子は十六であるが、まだ子供子供してゐた。兄弟もなく、父と母との間で育つたのである。わが儘ではあるが、素直だと、加川は思つてゐる。

加川は、いゝ氣持になつて、南向の緣側の藤椅子に腰を下ろした。蜻蜓[[6]](#footnote-6)が、草蓬々と生えた前栽に飛び廻つてゐる。

芙佐子が、ビールとコツプと、干蝦の皿とを載せた、盆を持つて來て、父の前の、テーブルに置くと畳に手をついて、

『お父さま、おかへなさいまし』

と、更まつて御辭儀をする。芙佐子は膝までのスカートと、半袖のセーラを着てゐて、髪はおかつぱだ。父そつくりの顔だ。

芙佐子は、コツプにビールを注ぐ。加川はぐつと一杯飲み干して、ますますいゝ氣持になつた。

『芙佐子。』

『はい。』

『お前は轉校した時に、どんな氣持がした？』

『どんな氣持？　それは辛かつたわ。折角なついたお友だちと別れるんですもの。敎官室を出る時にはわたししやくり上げましたの。』

芙佐子は、悲しさうな顔つきをした。

『さうか。先生に別れるのは平氣だつたのか。』

『先生もなつかしいわ。でもお友だちと別れるのが一番辛かつた。』

『Ｈ高女でも、もう新しいお友だちが出來たらう。』

『え、二三人。でもまだ、轉校してから、いくらもならないんですもの。』

　『さびしいか。』

　『それはさびしいわ。京城から來たといつて皆毛嫌ひするやうでもあるし――母校はなつかしいな。』

　芙佐子は甘へる。

　『Ｈ高女が母校ぢやないか。』

　加川は叱るやうにいつた。

　『だけど、だけど。』

　芙佐子は承服出來ないやうすであつた。

　子供に取つて、轉校はあれほど辛いものかと、加川は、つくづく感じた。

　夕食の膳が出た。

　『おもないし』

と、浪子が云譯をすると、加川は、

『そんなこといふもんぢやないといふのに。今戰爭中ぢやないか。』

　『御免なさいまし。』

浪子は、おろおろ聲になる。

『浪子、木村といふ子覺えてゐるだらう。』

　『木村ですか。』

　『うむ。いつか、脊の高い人と、親子で家に來たぢやないか。』

　『あ、あの子ですか。あの京城の子。出來さうな子と思ひましたわ。』

　『うむ。とても出來るんだ。身體は弱いがね。』

　『その子がどうかしたんですか。』

　『轉校をするらしい。Ｔ中學校から、あの子の成績證明を請求して來たんだ。』

　『まあ、どうして轉校なんかするんでせう、わたし轉校大嫌ひ。』

　芙佐子が口を挾んだ。

　『その子だつて、轉校は辛いだらう。どうもあれの父親が病氣らしい。』

　『田舎の學校がいやで、京城へ移さうとするんぢやないでせうか。でも不義理だわ。一年も立たずに轉校を思ひ立つなんて。』

　浪子は憤慨する。

　『一應さうも考へられるがね。木村の場合、さうではないと思ふ。きつと、何かのつぴきならない事情があるからだらう。』

『あなたは、何んでも好意におとりなさいます。世の中はそんなでないのに。Ｋにいらつしやる時だつて、辭退なさればいゝのに、國家のためだ、折角の期待だなんておつしやつて。』

　『まあ、お母さんたら。また。あんなこと。』

　芙佐子が浪子を睨む眞似をする。

　『お前が、この苦勞を厭うたら、誰か他の奥さんが、この苦勞をしなければなるまい。なあ、芙佐子。』

　加川は、ビールが廻つて上機嫌だ。でなければ。浪子の例の愚痴に、一つどなりつけたことだらう。

　『でも。お母さまも可哀想だわ。隣近所つてつても話相手もゐないし、女中もゐないし。』

　芙佐子が、今度は、母の肩をもつ。

　「馬鹿ツ。勿體ないことをいふな。校長夫人になつたのを身に餘る光榮と思へ。』

　加川は、御飯の茶碗を下に置いて、胸を張つた。

　『でも、女中一人位は。』

　芙佐子は云張る。

　『女が二人もゐて、何で女中が必要か。おれはまだ、女中を傭ふ身分ではないぞ。お母さんが年寄になつたら傭つてやる。』

　たうたう芙佐子も沈默してしまつた。

　『この南瓜はおいしい。』

　加川は、しばらくの重苦しい沈默を破つた。

　それでも、浪子も芙佐子も、何もいはない。釋然としないのである。

『この南瓜はおいしいぞ。砂糖なんかいらぬぢやないか。食物には、天然の甘味が備はつてゐる。お前たちは兵隊に行つたことがあるまい。おれは、山西前線で、炊事兵をやつたんだがね。高等官六等の文學士の炊事兵さまだ。それでも、女中なんかつかつた覺えはないぞ。砂糖がない、氷がないといつて不平をいつた覺もないぞ。』

　最初芙佐子が吹き出して、浪子もたうたう意地を折つて、笑つた。低氣壓は完全に解消したのである。

　『でも、あなたは、あまりに、家のことはそつち除けですわ。世間知らずでいらつしやるし。』

　浪子は、笑ひに紛らして、鬱憤の一端を洩らす。

　『おれは、兵隊さんぢやないか、上等兵さまだからな。』

　『神林さんは、兵隊さんでも、あんなに、家のことを心配なさるのに、食べる物だつて、どうにかかうにか手にお入れになるし。あなたは南瓜が甘いとおつしやつたけれど、この頃の南瓜が甘いことがあるもんですか、神林の奥様から、お砂糖を戴いてたのを、入れたから甘いんですよ。』

　『さうか。そんなら、お砂糖をいくらでも、貰つたらいゝぢやないか。おれは校長だから學校のことに専念する、お前は奥さんだから、南瓜を甘くすることに専念する――これをこれ分業と謂ひ、職域とはいふか。ああ、芙佐子。お前ももう女學校の三年だから、それくらゐのことは分るだらう。お母さんは、米英流の敎育を受けた、舊體制の女で仕方がないけれども。』

『まあ。』

浪子は呆れてしまつた。

『それから、女中が是非必要ならばだ――』

加川が、いひかけると、芙佐子は、この時こそとばかり、

『お父さま。本當に女中だけは一人、お願ひします。お母さまは、お體も弱いし、ケヂベでもいゝわ。』

と、強硬な要求をする。

　『今、お父さんが女中のことをいつてゐるところぢやないか。』

　『だから、是非ね、お父さま。その代り、お母さまも、もう、あのこと、Ｋに來たことは不平いはぬことにして、ねえ、お母さま、約束して頂戴。』

　芙佐子は、浪子に合掌して見せる。

　『女中が是非必要なら、芙佐子が一年休學をしろ。そして女中になつて、お母さんを助けろ。これから一個年が、決戰の一個年だからな。少くも、この一個年は、勞苦の一個年にしようではないか、前線將兵に對する義理からでもだ。』

　加川のことばに芙佐子は首垂れてしまつて、浪子は居住ひを直す。

　『うむ。さう解つてくれゝばありがたい。おれから禮をする。』

　加川は、兩膝に手をついて、低頭する。浪子も芙佐子も、手をついてお辭儀をかへす。

　『おれを世間知らずといつたな』

　加川は、肯きながら

『その通りだ。おれは世間知らずで、處世術が下手で、妻には頼ない夫だらう。芙佐子にも、腑甲斐ない父かも知れぬ。校長としても、決して手腕のある校長ではないんだ。おれは自分が校長の材にあらざることを、よく知つてゐる。たゞおれは一敎師だ。敎師が好きだ。子供たちが無性に可愛いゝ。それを敎へたい。これだけだ。誰か適當な校長が來たら、おれは平敎員として勤めさして貰ふつもりだが、それだからといつて、おれは、校長を止めようとは思はない。おれは下手ながら出來るだけのことはするつもりだ。Ｋ中學が一本立ちになるまで。進んで職を止めるやうな卑怯者ではない。だから、おれの心は、Ｋ中學で一杯だ。六十名の子供たちのこどで一杯だよ。だから家を思ふ暇がないんだ。お前や芙佐子には、誠に申譯ない話だが、許してくれ。今日は木村の轉校問題で、おれは、實は、氣が氣でないんだ。こんなでは、校長は勤まらないだらうが、生まれつきだな。おれは校長の器ではないんだ。校長は敎育家よりも行政官だね。學校をやつでゐる中には、轉校して行くやつもあるだらう。中途退學をするやつもあらう。放校處分をしなければならぬ場合もあらう。さういふ度毎におれのやうに、胸を痛めるやうでは、實際、やりきれぬからね。生命が續かぬ。おれは、おれの學校の生徒を一人も手離したくないんだ。皆四年間教へて、卒業さしたいんだ。しかるに、木村の問題だ。おれは何とかして木村を、この學校を離れないやうにしたいんだ。しかし、おれが校長であつて見れば、止める方法がないんだ。來る者を拒まず、往く者を追はず、と孔子さまもいつてはいらつしやる。しかし、おれは往く者も追ひたいんだな。木村を引き留めたいんだな。木村はいゝ子だ。物になりさうな子だよ。』

と、加川は腕を組んで、首垂れる。

　　浪子も芙佐子も、しんみりした氣持になつた。忝けないやうな、申譯ないやうな氣持ちになつた。

　『そんなに木村といふ子が、手離したくなかつこら、何か方法がないものでせうか。』

　浪子の心は、夫の心と一つになつた。

　『どうも。いゝ方法がないな。』

　加川は眼を瞑つたままであつた。

　『やつぱり、田舎の新設の學校が不滿で、京城の設備のよい學校へ移りたいといふんでせうか。』

　浪子は、どうしても、それのやうに思はれたのである。

　『うんにや。おれはさうは思はぬ。木村に限つてさうではないと思ふ。きつと、あの子のお父さんが病氣なんだ。それでＫへ來られないんだ。あの子のお父さんといふのが、稀に見る眞劍な人でね、ことに子供の教育には眞劍なんだよ。自分で、間借りをして、自炊をしながら、子供の世話をしたくらゐだからね、六十男がさ。』

　『あ、さうですか。自炊してゐたんですか。』

　浪子は感心の點頭をした。

『うむ、自炊してゐたんだ。それは無理だつた。木村さん、Ｋに來てから、めつきり老けちやつて、あまり急に痩せてゐた。こないだの草刈の時にも、木村さん來てゐたがね。子供たちに雜つて、草を刈つて、それを運んでゐたが、息が切れて、痛々しかつた。それでも三十貫もある草の束を、肩に載せてあの坂を登つて來るのを見て、おれはほろりとしたよ。しかし、やつれてゐるな、と思つた。咳をしてゐた。それで來られないんぢやないかと思ふ。その證據には、木村から手紙がないんだ。ベウキオクレルといふ電報が來たきりでね。』

『寄宿舎があればいゝんですけれどね。』

　浪子は、片付けながらいふ。

　『さうだ。寄宿舎がないと三分の一の教育しか出來ぬ。寄宿舎が絶對に必要だ。どうも子供たちが環境がよくない。實に可哀想だよ。うちの學校は、己むを得ない事情のない限り、すべての生徒を寄宿舎に収容するつもりだ。ところが、まだ、寄宿舎の意義が十分、皆に分つてゐないんだな。寄宿舎さへありや、木村のことも問題はないんだ。』

　『あなた、それほど、木村のことが氣になるのなら、家に預りませうか。』

　浪子がいふと、芙佐子は、

　『それがいゝわ。家には男の子もゐないんだから。』

と、眼を輝かした。

　『さうだな』

加川は考へ込んだが、それは出來ない相談である。校長が或一人の生徒を家に置くといふことは、よくないと思つた。

　『お父さま。いゝぢやありませぬか。わたし、お姉さんになつて世話して上げるわ。』

　芙佐子は乗氣であつた。

　『芙佐子の氣持には敬服する。しかしそれは不可能だらう』

　加川は、かう判斷してしまつた。

それより四五日後、加川は、學校にゐた。海洋訓練の方法や、後援會總會のことなんかで、日曜日であるにも拘はらず、校長以下職員は、學校にあつまつてゐた。

　農村であるこの地方では、田植や草刈などの勤勞奉仕ならもつてこいのところであるが、海洋訓練となると困る。海に恵まれない地方ではあり、川はあるが、何等の施設もない大きな川では、危險が伴ふし、水利組合の貯水池を[當][[7]](#footnote-7)にしてゐたけれども、夏中旱魃で、兩方とも放水してしまつて、游泳なんか出來やしない。遠い海水浴場へ出かける手もないではないが、それは、費用も費用だが、食糧が問題となる。そればかりではない、教員の中には泳げるものは一人もない。校長は長野の人で、神林は福井の人、どうしたものか、囑託の先生までも、山國の人であつて見れば、海洋訓練の指導者がゐない。やれ、漢江で、學童が溺死した、大同江でも溺死したといふ新聞記事が、海洋訓練を[控][[8]](#footnote-8)へた、教員の眼には大きく映つて人事とも思はれない。それだからといつて、海の今日、海洋訓練を止めるわけにも行かない。困つたものである。

後援會といふのは、Ｋ中學校設立期成會の後身で、校舎や寄宿舎建築、理科、體育に關する設備など、まだ、この後援會から、數十萬圓の金を引出さなければならない。しかるに地方の富豪は概ね邑内に住んでゐるので、學校の位置を邑内にしてほしいと、強く希望したに拘はらず、當局はその希望を容れなかつたといふので、富豪や有力者たちは、つむじを曲げてゐて、中々協力してくれない。また、或有力者の如きは、自分の子が入學出來なかつたこざを不滿に思つて、サボターヂユをしてゐる。

　かうなると、すべてが校長の手腕といふことになるのだが、加川は書齋の人、講壇の人で、人を操縦する能を持たぬ。水に泳げないよりも、もつと世の中に泳げない。

　『校長が居るから』

當局も、地方民も、皆校長に責任をなすりつける。まるで、校長が自分の金で、經營する學校見たいなことをいつてゐる。

　校長は、思案の擧句、道廳へ出向いて、學務課長や内務部長に逢ふ。

『道の豫算は、定まつたものしかないからね、何とかうまく後援會と話をつけてくれませぬか。教員にしても、こちらではね。』

これでは、取りつく島がない。加川は、何だか、自分が酷く踏みつけられたやうな氣持で、そゝくさと道廳を去る。

加川は、就任挨拶旁々地方の官民有力者なるものを訪ね廻つたが、第一文化程度に於いて話相手になつてくれさうなものが幾人もない。たまに人物に於いて、話せるものがあるかと思ふと、それは經濟的には無力な人であり、經濟的に有力なものとなると、何かしら代償を要求するやうな人間ばかりである。後援會長は、さすがに入格者で、いはゞこの學校の生みの親ともいふべきであるが、この人はすでに、ありつたけの力を出し盡くしてゐる。彼は田といふ六十近い、もと教育界に居つた人で、三十萬位の資産を作つた人ださうであるが、最初に二十萬圓を、設立基金として出したのである。田は子供のない人だ。

　もう一人。子供のない寡婦が、遺言で、自分の財産全部をＫ中學校設立基金として寄附したのがある。この遺産といふのは十萬足らずであつたが、これが地方民を奮起させた基本になつてゐる。これらの人々こそは眞の義人で、加川は、この寡婦の墓に、恭しく學校の出來たことを報告したのであつた。

　今度出來た後援會といふのは、わづかの、代償を求めぬ義人と學父兄とを纒めたもので、田が相變はらず中心人物であるが、上にも述べた如く、田には、もう金を出す力はない。それに、田も加川に劣らない、非世間的な人物で、いはゆる手腕といふものを持合はせてゐない。

　明日は、後援會の第一回總會で、何としても、差當り五萬圓の金を、この會合で聚めなければならないのである。校舎基地三萬坪、坪當り一圓で三萬圓、臨時建築を要する倉庫、運動場、その他約二萬圓である。今の假校舎も、この儘では越冬は難しい。第一、風で倒れる恐れがある。井戸も掘らねばならず、宿直室も建てねばならない。小使室もない。便所もない。實にないものづくしで、校舎、寄宿舎、運動場、理科室をつくり上げるのは、設立期成會の責任だともいふし、でない、ともいつてゐる。加川は、いくら考へても妙案が浮んで來ない。

　『明日の後援曾に訴へよう。』

　加川は漫然、かう考へて居る。

　その時、李家時烈が來た。彼は期成會の理事の一人で、寄附金募集の功勞者であるが、加川はこの男が嫌ひだつた。それは、李家は策略家だからである。學校が出來るまでは、李家が、策略を使はうが、術策を弄しようが、加川の知つたことではない。しかし、一旦學校が出來上がつて、自分が、責任者となつたからには、學校の名に於いて、策略を施すこと　　　　　　　　　　　　　　　　は金輪際相成らぬのである。

　『やあ、熱うございます。』

　李家は、快活に、校長その他の職員に挨拶をした。

　加川は冷やかに、李家を迎へた。彼は内心嫌ひな人、お世辭笑ひをする術を知らないのである。

　『熱いですな。』

　神林は、加川の冷やかさに對して、李家を庇ふやうに、

　『校長先生。李家さん、この頃、後援會のために、寝食を忘れて、活動されてゐるんです。李家さん、さあ、お掛けなさい。』

　と、いつて、李家に椅子を勸める。李家は、校長席の前の椅子に、坐りたいやうな素振であつたが、思ひ直して、神林と差向ひに、椅子に腰を下ろした。

　『あ。さうですか。』

　加川は、かういつたきりだつた。『それは、御苦勞さまです』といはうとしたけれども、止めた。さういへば、李家の策略を認めることになると思つたのである。

『いかゞです。収穫がありさうですか。』

神林は、李家をして、その策略を校長の耳に入れさせようとするのである。

『それは、校長先生の出方一つですな。要するに斷の一字です。』

李家は謎のやうなことをいふ。これは加川に投げられる策略の罠だ。

　加川は、わざと、李家のいふことを聽くまいとする。扇子を使つてゐたのを止めて、成績表を明ける。生徒たちの成績に可や不可の多いのが、癪に觸る。木村たちの秀、優組に眼を止める。木村の正直さうな、自分のやな非怜悧で、非世間でありさうな顔を思ひ浮べる。木村は見たところ、悧發な子ではない。むしろ愚直を思はせる眼肘だ。それが、限りなく加川の氣に入る。加川の持論では、世の中を腐らせるのは、悧巧者だといふのである。ことに朝鮮人がさうで、朝鮮人の子供にはあまりに悧巧さうな奴が多い。加川には馬鹿面が欲しいのである。東郷も山本も悧巧な人間ではない。むしろ愚直な人間である。愚直だから、家も身も忘れて、海の守りばかり考へてゐたのだ――加川はかう信じてゐる。田會長も愚直だから好きだ。

　『何しろ、鐡は熱い中に叩かぬと、固くなりますからな。』

　李家は、加川の注意を惹かうと試みる。

　『今の中なら、金川も朴澤も、まだ色氣があるんです。明日の総會の機會を逃がしたら、好機は永遠に去るでせう。實は神林先生、昨夜も徹宵して、金川を説きつけたんですよ。彼もさるものでしてな。中々腹は割らぬですよ。はつは、はつは。』

　これで、李家は、策略の全貌を略々明らかにしたのである。その策略とは他ではない。田の會長と、呉本の副會長を止めさせて、金川と朴澤を擁立しようといふのである。さうすれば、金川は十萬、朴澤は五萬、必らず出すといふのである。金川は元道會議員であり、朴澤は、醸造成金で、道會議員になるたがる人で、いづれも、田や、呉本とは對蹠的な人物だ。どこまでも、利己的で、ギブ・アンド・テイク主義の人である。實は加川も、李家の紹介で、二人に會つたことがあるが、初對面の印象で、これは、君子人近づくべき人物にあらずと見たのであつた。

　しかし加川が、この二人の會長、副會長になることを反對する理由は、その人物にあるのではない。田、呉木兩人の功績を裏切ることを懀むことにある。なるほど、田、呉本は、今日では無力な人である。もう力を出し盡くしたから、お拂箱である。これを奇貨として、田、呉木を逐出して、金川、朴澤を迎へるといふことは、加川には出來ない藝當だ。李家は、加川にそれを勸めようとするのであり、神林は、學校のためになることなら、それでもいゝではないかと、加川の優柔不断をもどかしがるのである。

李家は、表面、神林と話すと見せかけて、實は、校長の耳を要求してゐるのであるが、加川は一向反應を見せない。神林は、加川の性格からいつてあゝなつては挺でも動かないことを知りながらも、李家の策の實現を希望してゐる。どうも、加川のやうに、誠直一點張のやり方では、Ｋ校にいついゝ日が廻つて來さうにもない。一寸した讓歩で、十五萬圓の金が轉がり込むのではないか。さうしたら、敎官の官舎も出來るだらう。その十五萬圓といふのが、何も不正不義の金ではないのである。

　神林は、李家に、眼くばせをした。直接ぶつかつて見ろといふ暗號だ。

　李家は、それと呑込んで、やをら立ち上がつて、校長席の前へ行つて、椅子に腰をかける。

　加川は、しぶしぶ見てゐた成績表を脇へ押しやる。

　李家は、加川が自分に眼を向けた機會を捉へて、

　『いかゞですか、校長先生。明日の總會の對策は？』

とつき込んだ。

　『對策？』

　加川は、しらばくれるやうな調子だ。

　『さうです。ちゃんと、お膳立をして置かないとがやがやいつて、それつきりになるに定まつてゐます。誰でも金を出すことは、嫌ひますからね。そこをです。豫めよく策を練つて、大衆をその策の網に追ひ込むんですな。でないと、効果は望まれませぬ。校長先生に何か對策がおありでしたら、私も及ばずながら一臂の力になりませう。』

　『何も策はないですな。』

　加川は、素氣なくいふ。

　『それぢや、明日、どうなさるのですか。』

　『唯、皆さんに、學校の事情を訴へるだけです。そして、後援會の皆さんの御協力を待つ、といふだけです。』

『それぢや、困りますね。世の中はさう簡單なものぢやありませぬから。魚を取るには網も必要だし、餌も投げねばならぬし、潮時といふものも、よく見計はねばなりませぬからな。』

　『……』

加川は取り合はない。ぼんやりした顔で、李家の話を聽いてゐる。聽いてゐるといふよりも、李家の顔を見てゐる。

　『丁度今が潮時だと思ふんです。大物が網を待つてゐるんです。いやすでに網に人つてゐるんです。今はたゞ引上げさへすればいゝやうに、ちゃんと手筈が出來てゐるんです。校長先生さへ、うむとおつしやればいゝんです。』

　『僕は、うむとは申せませぬな。』

　『どうしてですか。』

　『いや、そんな事はいかぬ。いけませぬ。』

　『ぢや、この事は私たちに御一任なさつて、明日校長先生は默つていらつしやりさへすれば、いゝんです。田さんや呉本さんには、私が話をつけますから。』

　『いや、いけませぬ。』

『ぢや、どうなさるつもりですか。あの十五萬が入らぬとなると、さしあたり――』

『金が入らなければ入らないで結構です。』

　『それぢや、學校がどうなりますか。』

　『金川さんや、朴澤さんが、學校のために、本當に教育のために、金をお出しになるんでしたら、喜んでお受け致しませう。』

　『でも、先生、金持といふものは――』

　『いや、そんな汚い金は要らぬ。神聖であるべき教育事業です。これは國家事業ですぞ。戰爭ですぞ。學校に金を出すことは、國防獻金と變りありませぬ。國防獻金に交換條件がありますか。』

加川は熱して來た。顔が赤みを帶びて眼が光る。

『それはさうですけれども――』

『いや、何といつてもそれはいけませぬ。』

『だから、校長先生は、默つていらつしやつて、これは、後援會のことだから――』

　『いや。いけませぬ。断じていけない。校舎や運動場はなくても結構、學校の精神が汚されたらおしまひです。僕はこの精神を護ることを校長としての責務だと思つて居ります。』

　『さうですか。』

　李家は、これ以上いふことがなかつた。校長のいふことが正しいといふことを否認するのではないが、事業家としての通念を辨へない、愚直さを憐んだ。

　『失禮します。』

　李家は、『やるならやつて見い』といふ氣持で教官室を去つた。

　神林も、他の教官や職員たちも、加川の、正しさには敬服するが、こんなことで、果して學校がやつて往けるかを疑問に思つて、いさゝか心細かつた。

　ものゝ三十分も立つてから、神林が、校長席へ往つて、叮嚀に腰を屈めた。

　『校長先生。神林はお詑び申上げます。』

　『何ですか。』

　加川は怪訝な顔をしてゐた。

『神林、校長先生の態度を頑固だと思つてゐました。しかし、先生の御話をよく味つて見ると、校長先生の態度は、當に然るべきだと悟りました。神林の不明を謝します。』

神林は、もう一度、生徒が先生の前でするやうに腰を屈めた。

『あ、そのことですか。どうもありがたう。』

　加川は席を立つて答禮した。

　『神林先生、今、日本は正しさを求めてゐるのです。破邪顯正の秋です。」

加川は、神林の態度を心から喜んだ。

　『ごもつともです。貧しいなりに正しく行きませう。』

　神林は、もう一度、校長に頭を下げた。

　他の教官たちも、神林と同じ氣持で、頭を垂れた。

　加川は、心の中で、十五萬圓より貴いものが得られたことを、神に謝した。

　これで、明日の後援會は．全然無對策で行くことに、方針は確定した。たゞ誠をもつて、父兄たちに臨まう、と態度が定まると、何か非常に強くしめつける或羈絆から脱れたやうな、心の寛ぎを、一同は感ずることが出來て、このみすぼらしい校舎も、居心地のよい、輝かしいものゝやうであつた。

一同は番茶を啜りながら、前例のない、和やかな雜談に耽つてゐた。そのとき、一人の、朝鮮服の中年婦人が給仕に案内されて、教官室に入つて來た。大變そはそはした態度である。

　その婦人は、校長の前に丁寧にお辭儀をした。

　『わたくしは、木村太郎の母の道子でございます。』

　『あゝさうですか。さあどうぞ』

加川は、木村の母に椅子を勧めたが、道子は、坐らうとしない。

『木村さんはいかがですか。御病氣ださうですが。』

　『はい、木村は京城に歸ると、どんどん衰弱が加はりまして、今入院して居ります。』

『あゝさうですか。それはいけませぬな。どうも衰弱して居られた――。』

加川は、草刈の日の木村のやつれた姿を思ひ出した。

　『それでも、木村は、學校に申譯がないから、無理をしても來る、子供の教育も戰爭だから、子供の教育のためには、死んでもよい、と申して居ります。ことに校長先生に申譯ない、どうしても子供を校長先生にお預けしなければならないと、申して居りまして――』

　道子は、おろおろ、いひつまつて來た。

　『あ、さうですか。』

　加川も、道子の顔を見るに忍びないやうに、首垂れた。

　『太郎は太郎で、Ｋへ行く、Ｋへ行くと泣いて居りますし、それをわたしが心を鬼に致しまして、無理矢理にＴ中學に編入試験を受けさせました。校長先生、誠に申譯ございませぬ。」

　道子は眼を拭いてゐる。

　『いや。事情は承はりました。景山さんが、京城から歸つて、木村さんの御病氣のことや轉校のことなども話されましてね、もうちやんと書類は出來て居ります。』

　加川は神林に、

　『神林先生。木村さんの坊ち[や]んのあの書類はまだ出してありませぬね。』

神林は、自席に立ち上つて、

　『はい。何なら、一學期間休學にして轉校は思ひ止まつてはどうかと、木村さんの御意向を確かめようと思ひまして。』

といつて、Ｔ中學校長宛の木村轉校依囑の公文の封筒をもつて來て、校長に差出す。

　『神林先生です。木村さんの奥さんです。』

　校長は、道子を神林に紹介する。

　『神林先生で、いらつしゃいますか。木村も子供も、しよつちゆう先生のことを申して居ります。子供がお世話になりまして。』

道子は、神林に、お辞儀をする。

　『木村さんが御病氣で、さぞ御心配でせう』

といつて、神林は、自席に歸る。

　『事情がそんなでは己むを得ないでせう。僕も實は、坊ちやんを手離したっくなかつたんです。』

　道子は、初めて加川に會ふのであるが、加川が、太郎をどれだけ、思つてくれるか、といふことが解ると、こんな校長から、子供を引離すのは、大きな罪のやうでもあり、勿體ないやうでもあつて、思はず啜り上げてしまつた。道子が、道々、校長や神林先生の、敵意ある顔を豫想したゞけに、濟まなさが、一層強く胸を打つたのである。可愛いゝ子供を自分の傍に置きたいと思つたことが、道子には、恥かしくもあり、悲しくもなつた。

　道子は泣けて泣けてどうするこども出來ない。五十女の自分であることも忘れて、加川に對して、さめざめと泣くのであつた。

　十分も立つたらう。道子[が]、校長から、その封筒をいたゞいて、下らうとすると、加川は、

　『これは公文ですから、個人に渡すべき性質のものではありませぬが、もう一度、木村さんども御相談の上、考へ直す機會を殘すために、差上げるのです。坊ちやんは、除籍せずに待つて居りますから、篤とお考へ直しを願ひます』

と、眼に涙を浮べてゐる。

　道子は、泣き崩れるところを、やつと怺へて、しやくり上げながら、教官室を出ると、逃げるやうに、校門を出た。

校門といつても二本の腐りかけた棒杭が立つてゐて、そこにＫ公立中學校といふ新しい看板がかつてゐるだけだつた。

道子は、その柱につかまつて、おいおいと聲を出して泣いた。

道子は、こんなに泣いたことは、生涯始めてゞあつた。

道子は、やつと泣き止んで、百米も離れてゐる教官室に向つて、

　『校長先生。すみませぬ』

と、呟きながら、腰を屈めて敬禮した。頭を上げた時、道子の涙ぐんだ眼には、窓から眺めてゐる、校長の顔が映つた。

　『たうたう木村は、往つてしまつたよ。』

　夕食の時、加川は、浪子や芙佐子に、今日の話をした。

1. 『國民文学』1943年10月号 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「温い」は「ぬるい」「ぬくい」と読む。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 原文は「河原」と誤植されている。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 浴衣（ゆかた） [↑](#footnote-ref-4)
5. 衣類を入れる籠 [↑](#footnote-ref-5)
6. 蜻蛉（とんぼ） [↑](#footnote-ref-6)
7. 原文は「目當」 [↑](#footnote-ref-7)
8. 原文は「差し控」 [↑](#footnote-ref-8)